

井上靖研究

第 17 号

目 次

<論文>

- 井上靖「異域の人」論 —読みをめぐる— …… 勝倉 壽一 (1)
「洪水」における〈渡河〉の意味 —西域という異境— …… 劉 淙淙 (16)
井上靖の詩学 …… 中嶋 一裕 (31)
『北の海』柔道部退部事件の真相 —足立浩資料による— …… 宮崎 潤一 (43)
死との対話、生の輝き —『化石』論(二)— …… 小関 一彰 (63)

<エッセイ>

- 井上靖「大洗の月」の朗読を聞く …… 金子 秀夫 (81)
井上靖詩集『シリア沙漠の少年』発行のこと …… 福田 美鈴 (83)

<インタビュー>

- 石原國利氏「井上靖先生 —想い出すこと—」
聞き手 田村嘉勝 …… 記録 宮崎 潤一 (86)

- 「新興キネマ」脚本部時代の知られざる井上靖の世界 …… 根本 隆一郎 (102)

<新資料>

- 脚本『白銀の王座』 …… (109)

<新刊紹介>

- 井上靖文学館編『教科書で読んだ井上靖』 …… 瀬戸口 宣司 (146)

- 井上靖研究動向(平成26年1月~28年12月) …… 劉 東波 (147)

- 井上靖参考文献目録(平成26年1月~28年12月) …… 山田 哲久 (152)

- 井上靖研究会会則 …… (162)

井上靖研究会

「インタビュー」

石原國利氏「井上靖先生—思い出すこと—」(聞き手 田村嘉勝)

記録 宮崎潤一

司会 本日は皆さんご存じの石原國利さんに、「井上靖先生—思い出すこと—」の題目で、田村会長のインタビュー形式で始めたいと思います。

本日、石原さんが貴重な資料をたくさんお持ちいただきました。その中で、大変有名な「氷壁」の「ナイロンザイル事件」という「氷壁」の最も貴重な資料となった本をお持ちいただいたんですが、かなり時間も経ってまして触ると崩れるような部分もあるかと思えます。こちらの資料、全てお話の後、ご覧いただいて構いませんが、「ナイロンザイル事件」については、遠くから見ただけ、触らないで願います。

それでは田村会長、お願いいたします。

田村嘉勝会長(以下、田村) 初めから注文を申し上げて申し訳ございませんけれども、とにかく貴重本でして、透明の袋に入っておりますが、この形でご覧いただければと思

います。これから始めたいと思いますが、井上靖研究会が、こういう企画を組んだのはこれで4回目になります。

生前、井上先生というよりも、研究対象として語りますので、井上靖と言わせてもらいますので、了解いただければと思います。生前、井上靖とかかわっていた方々に、是非これは記録として残しておかなければいけないのではないか、というふうなことで、今回4回目ということ

で石原さんに来ていただきました。

このプリント、皆さんのところに行つてると思いますが、けれども、とにかくですね、石原さんは先ほどお話ししましたけれども、魚津恭太の、モデルでありまして、私も、本当にここに石原さんがいらつしやるということ自体がですね、不思議だなあというふうな気もするんですけど、実は数年前に立命館大学でこの会がありました時に、やはり石原さんがおいでになりました。最後の懇親会まで参加されたということがございました。事務局長とどなたに今

回しようかと話しまして、とにかく石原さんにおいでいただかなければいけないのではないかとということで、昨日、九州博多の方から、奥様といっしょにこちらの方にいらつしやいました。

それでは流れとしまして、まず、私の方から大体六十程度、石原さんにご質問いたします。石原さんの方から自由にお話しして頂きたいというふうに思っております。

それでその後ですね、皆様の方から質問を含めてお話しを頂きたいと考えております。よろしくお願いいたします。それでは石原さんよろしくお願いいたします。

田村 石原さんは「氷壁」の主人公魚津恭太のモデルとして知られますが、初めて井上靖さんとお会いした時の思い出についてお話ししてください。

石原國利氏(以下、石原) 初めまして石原でございます。普段は文学とは全く離れたことをしております。町の一介の一市井人にすぎませんので、先生と言われると身が縮む感じがするような自分です。どうぞお許しただきたいと存じます。

井上靖先生とのつながりについてのお尋ねですけれども、私は学生時代、登山に熱中しております。とにかく登山が全て、というふうな生活を過ごしておりました。

山になぜ登るかというふうなことをよく尋ねられますけれども、登山というのも非常に時代とともに変転しており



思い出を語る石原國利氏 右は田村嘉勝会長

まして、最初にアルピニズムというようなことを言われるようになりしたのは、ヨーロッパからなんです。これは最初の大きな目標はエベレストが目的だったんです。エベレストの頂上に人類が到達できるか、ということが目的で、これにイギリスが一九二一年にとりかかりまして、一九五三年に三十三年かかって頂上に辿り着いたというようなことで、その思想が日本に、横有恒さんがヨーロッパから帰ってこられて普及されて、日本でも「困難を克服して山に挑む」というアルピニズムという思想が、特に若い人の中にも興ったわけです。

まず頂上に辿りつくということが第一目標でした。頂上が登り尽くされてしまいますと今度はもつと難しいルートから登るといふような流れが起きたわけで、それら難しいルートから登られると、今度は最終的には岩壁を登るということが一つの目標になってきたわけです。

ヨーロッパではアイガーの北壁というものがございすね。これは何十人という人が死んだり怪我をしたりしています。日本でも谷川岳というのは、これはもう二百人近い人が岩壁で遭難して亡くなっているような事態にまでなってきた、私どもが登っていた時代は、難しい岩壁をどうやって登るかという時代でした。

私たちが目標とした前穂高の東壁という、非常に高度差のある岩壁があるんですけど、これは夏場は登られておったんですけど、雪の付いた冬に完登した人はいなく、途中で横道に逸れて頂上に達したという人はい

んですけれども、真つ直ぐ登ったという人はいないということ、私たちはそれを目標に前穂高に取り組んだわけ

です。その時に起きた事故がこのナイロンザイル事件ということなんです。起きたのは昭和三十年の正月なんですけれども、昭和二十九年の暮れから穂高に入りまして、三十年になつて岩壁にとりついたわけなんですけれども、その時に使ったのがナイロンザイルというザイルなんです。岩登りをする場合は、身の安全を確保するためにザイルを使つて登らなければなりません。

墜落したときに止まるようにザイルで止めるわけなんです。それで登山技術がそれについてあるわけなんですけれども、私たちも従来の登山技術を元にして、ザイルを更に進化させた道具として、ナイロンザイルを採用したわけなんです。ナイロンザイルというのは戦後、昭和二十年（一九四五）以降、使われるようになったザイルでして、これはナイロンという繊維ができて、全ての性能が優れていると、引つ張る力はもちろんのこと、軽くて凍らない、それからどういふ場合にも対処できる柔軟性があるということ、ナイロンのザイルは採用されて来たわけです。最初にそれを使ったのはフランスのアンナブルナ隊です。

世界には8峰の8000メートル級の山があり、これジャイアンツと呼んでいますけれども、一九五〇年にこれを最初に登ったのがフランス隊です。フランスの優秀なガイドを集めてネパールに遠征隊を出して、頂上に達した。

その時に使ったのがナイロン部隊と言われ、ナイロンザイル、ナイロンのテント、ナイロンのウインドヤッケですか、そういうのを使った隊でした。日本でも、マナスル隊がこれを採用しまして、昭和二十八年（一九五三）マナスルの頂上真近に達するといふようなことだったわけなんです。それで国内におりました私どももナイロンザイルをいふことで、当時非常に高価だったんですけども、求めて、初採用というときに発生した事故なんです。

私どもは昭和三十年（一九五五）の一月一日にベースキャンプを出発しまして、前穂高岳東壁に取りついたわけなんです。頂上直下で日が暮れてしましまして、ビバークと言いまして、緊急宿泊、岩棚に座つてツェルトザックという簡易テントを被つて夜を過ごすといふような過ごし方をして、翌朝、二日の日に再度登り始めて、本日に、登攀終了点まであと7、8メートル、もうちよつとで頂上間近だといふところで、先頭の若山五朗君が上に出ている岩にザイルをかけて、上にあがろうとしたんです。足を滑らせてもザイルをかけてますから当然止まる。当然なわけなんですけれども、その時にザイルが……、私、二番目でザイルを確保しておったんですけども、私に衝動が全く伝わらずに、ブツンともう、本当にあつてなく切れて、若山君は岩壁の下まで落ちていったといふことが起きたわけなんです。これは登山界でも大問題になりました。私どもはナイロンザイルが切れて遭難したといふことを発表したわけなんですけれども、現場の関係も詳しくいふ位置関係で

あったといふようなことも発表したわけなんですけれども、登山界ではナイロンザイルは果たしてそんなに弱いものであろうか、そんなにあつてなく切れるものであろうか、といふようなことが問題になったわけです。

ところが我々が調べてみますと、私たちと前後して合計三件、穂高でナイロンザイルが切れておったわけなんです。最初に切れたのは二十九年の末に慶応大学の登山クラブ、山岳部でなく、東雲（シノノメ）山溪会という登山クラブの方たちが同じ穂高山系の明神岳というところを登つていて、ナイロンザイルが切れて、一人重傷になって、しばらく意識不明だったといふような事件が起きています。それから私たちが事故を起こしたといふことを知つて、救援に駆けつけようとした大阪市立大学の山岳部の方も、救援行動中にスリップして、ナイロンザイルが切れて雪だまりに落ちて、この方は大した傷も受けずに助かったと、続けて三件、ナイロンザイルが切断するといふことが起きたわけなんです。それで私どもは当然、弱いと……、非常に欠陥があるのではないかと……、こつこつ三件とも岩角に掛けた場合に切れると、だから強いと言われているけれども、岩角に対しては非常に弱いのではないかといふ疑問を登山界に提出したわけなんです。

ところが登山界では、果たして弱いんであろうかどうかといふようなことが議論になったわけなんです。その時に日本山岳会の関西支部長で大阪大学の教授の篠田軍治といふ方がいらつしやるわけで、この方の監督で、ザイルを

作った東京製綱で公開実験をしますということを発表されて、これが、その年の四月二十九日、東京製綱蒲郡工場の中に大きな鉄製の櫓が建てられまして、公開実験が行われました。

公開実験の結果、やはりナイロンザイルは切れない。麻ザイルより数倍強いという結果が出たわけでございます。

そして、私共が発表しました、切断時の位置関係、すべて再現しましたけれども切れないと。それから麻材のザイルとの比較。やはり実験されましたけれども、やはりナイロン製は麻材より数倍の強度をもつということが大々的に発表されたわけです。新聞・山岳雑誌すべて強いんだ、優秀なんだということが公になりました。

それで、私たちの言うことはまったく否定されたという事態になったわけです。

ところが私たちの山岳会の会長は、亡くなった若山五朗君のお兄さんで、石岡繁雄さんという方ですが、名古屋大学の工学部の第一回卒業生なんです。この方がそんなはずはないということで、ナイロンザイルの岩角についての性能について名古屋大学の協力を得ながら、その結果鋭い岩角には弱いということがはっきりした形で把握できたんです。

そして、東京製綱の実験を指導した篠田軍治博士の発表に対して「いままでの発表では次の事故が発生する心配が非常に大きい。だから公開実験の結果は誤りであるということを発表してほしい」ということを再三、お願いしまし

た。それからだんだん要求という形でいったわけなんですけれど、誠意ある回答が出ない。ということで、私たちは、今迄のいきさつをすべて網羅した資料集といった、それが「ナイロン・ザイル事件」という、これが当時のものですけど。これは当時のガリ版刷りなんです。印刷代もなくてガリ版刷りの印刷で作りました。二百部作って百部くらいを各新聞社、それから山岳雑誌なんかに送りました。今ではもうこんなボロボロになってしまつて、非常に貴重品になってしまつて……。

これを編集した石岡繁雄さんの生誕百年記念展を今、上高地でやっているんですが、八月いっぱいやっていきます。それでそれを機会にこれを活字化したものがこれです。これは保存のため、僅かだけ活字化してつくつたという状態です。あとでご覧になってください。

そういうことがあります。ナイロンザイル事件という、これが「氷壁」の出発点なんです。

このお送りしたという一冊を、三笠書房の編集長の長越茂雄さん、別名安川茂雄さんが井上先生に「こういうことがおきてますよ」と「ナイロン・ザイル事件報告書」をお見せになった。

井上先生が「これはおもしろい是非、当事者に会つてみたい」ということをお話になった。この本の「ナイロン・ザイル事件」を編集した石岡繁雄さんは当時、名古屋大学で事務官をなさっていました。

日本育英会がありますね。日本育英会は当時まだ日本の

貧しい時代で育英資金をもらうことが非常に困難な時代でした。育英資金を取得するのも競争でした。それで一番公平な決定の仕方ということを石岡さんが論文文化して発表された。文部省が長いこと研究して「一度話にきてください」ということで、育英資金関係の国立大学の関係者を全部集めて講演会が行われました。

石岡さんが上京されるときに「東京へ出るときに長越さんから井上靖という作家に是非あつて欲しい」という依頼がきています。だから石原君も一緒に行かないか」と声がかかりました。当時私は学生で東京にいましたので、「じゃあお伴します」ということで、まず長越さんとお会いすることになりました。

三笠会館（銀座五丁目）というレストランがありましてそこで落ち合うということになりました。一緒に行きました。私はもちろん石岡さんも長越さんとは初対面であつたけれど石岡さんと長越さんは、方や穂高、方や谷川岳の第一人者ということでお互い文通もあるし知り合ひでした。けれどもしかし、顔を合わせるのは初めてだったらしいので……それで会館まで行きましたら「井上靖さんが君たちには是非会いたいといっているいまから行こう。」と言われて

「ええ結構ですよ」ということで三笠会館からタクシーで……。そのころは井上先生は大井町にいらつしやいましたね。大井町まで行って初めて井上先生に会いました。昭和三十一年九月の暑い時期でした。「ナイロン・ザイル事件」の本が出たのは昭和三十一年の七月ですから、九月頃だと思

います。それで井上先生に初めてお会いしたとき、そのとき井上先生が「この資料に関心を持っている。これを小説の材料として使わせて下さい」ということを私共におっしゃいました。それで私共は「事実が曲げて書かれなければ結構です、どうぞお使い下さい」ということで了承したわけです。「じゃあ事実関係を色々お聞きしますから」ということで、私ちように学生で世田谷に下宿していたので、「石原君話をきかせてください」ということから色々交流がはじまつた次第でございます。

ちよつと長くなりましたが以上のようなことでございます。

田村 石原さんは、井上靖が「氷壁」を連載中、しばしば取材を受けたと伺っていますが、井上靖は、石原さんに主にどのようなことをお尋ねになりましたか。取材中の井上靖についてくわしく教えてください。

中でも井上靖にナイロンザイル事件についてどのように話されましたか。特に印象に残ったことがあれば教えてください。

石原 井上先生にはお会いして、事実関係から説明するということからはじまつたのです。井上先生は、最初に私に對して、「私は登山のことは、全く何もわかりません。だから、すべて教えて下さい」と言われました。そして、大学ノートを広げて私の言うことを逐一メモされておりました。

た。中には絵を描いて「これでいいですか」ということを確認しながら、作業を進められました。

私まだ学生で九州から出てきて世間のことを何も知らない。だから長越さんが井上靖先生のことを「先生、先生」とおっしゃるんで、作家の方に会うのは私は生まれてはじめてなんです。作家の方を先生と呼ぶのも知らなかった。先生といえは学校の先生かお医者さんくらいしか呼んだことない子供だったんです。長越さんが「井上先生、先生」と呼んでらっしゃるので……。どう呼びするのか戸惑っていました。

それから井上先生の私が知っていることを聞き取る作業の進め方は学者と一緒にだっような気がしました。すべてを記録して、それが間違えがないように確認をして、特にさちつとされる。というようなことから、すばらしいお方だということでも私も自然と先生、先生とお呼びするようになりしました。そういう関係でございいます。

田村 石原さんは「氷壁」連載終了後も、ともに穂高岳に登る「かえる会」などで井上靖と交流が続いたと伺っています。「氷壁」連載終了後の井上靖との交流について、特に登山中の井上靖の行動について印象に残ったことがあればお話しください。

石原 「氷壁」が昭和三十一年の暮れから朝日新聞に連載され、昭和三十二年五月に終了してこれが一冊の本になり

ました。これが、初版本です。あと、朝日新聞の連載中の挿絵を生沢朗先生が本になさっている。そういうようなことで、連載がおわってからはしばらくはもう、先生にお会いすることもなくて、そのままになっていたんですが、あるとき何かのきっかけで「穂高に行きますけれど一緒に行きませんか」という誘いが先生の方からありました。それで何人かの親しい山の仲間を誘い出して「じゃあお伴します」ということで行き始めたわけなんです。

どうして「かえる会」といいますと、この「氷壁」の中で、穂高に明神という地域があります。そこで、春が終わって蛙が地上に溢れるようになることを描写してあるんですけど、それをもとに「かえる会」という集まりができたというようにお聞きしました。私共が参加したのは二・三回目ころのことだったと思います。

それで山の中の井上先生はどんなだったかというところ、非常にくつろいでおられました。仕事を離れてくつろいでおられるということはよく分かりました。

徳沢園という所へ泊まってから濁沢というところまでいっつもお伴したわけですけど、途中坂がきついわけですね。井上先生は腰に手をあててゆっくり登りながらきつてきつとか弱音を吐かれませんでした。それはいつも感心していました。みんなきつそうに「あー、きついな、きついな」ということをおっしゃっていましたけれど、先生は腰に手をあててゆっくり黙々として登っておられました。それが非常に印象に残っています。

田村 一九七一年これは昭和四十六年の九月から十月にかけて、石原さんは、井上靖のネパール・アフガニスタン取材旅行に同行されともにヒマラヤ山地へ足を踏み込まれています。そのヒマラヤ旅行の際の井上靖との思い出についても聞かせてください。

石原 先ほど話しました「かえる会」の山行きで非常に親しくなりまして、忘年会にもご招待いただいたりしています。それでそのあと是非家に来てもう一度飲もうと誘われて、二次会、三次会と深夜までお酒のおつきあいをさせていただきました。

その時に井上先生が「山はいいな、ヒマラヤなんか行くといいな。」なんていうことをおっしゃっていましたので、私共が、昭和四十六年にヒマラヤ行きを計画したんですけれど、先生に「今度ヒマラヤで月見をするトレッキングをしよう」と計画しております」というようなことで計画の概略を話したところ、「うーん」といつて黙って聞いておられました。そして「一日考えさせてくれ」ということがあっておわかれしたわけです。

翌日になりますと私共に電話がありました。「私も行きます」という言葉でした。私共もまさか井上先生がヒマラヤまでおいでになると思わなかったので、我々は大慌てで慌てたわけです。これが先ほどの日程の昭和四十六年の九月末から十月末までのことです。このとき井上先生は

「ヒマラヤ行く前にシルクロードのアフガニスタンに寄りたい」ということをおっしゃったわけです。シルクロードのことに関して私もはまったく無知でした。それで私共の山岳会の友達に「井上先生がアフガニスタンに寄りたいとおっしゃっている」ということで、丁度私の友人にナジブ・モハバット君がいました。

ナジブ君と呼んでいます。アフガニスタンから来た留学生で名古屋大学の卒業生です。ナジブ君に同行をお願いして快諾を得ました。私は大学を出てすぐ、名古屋大学の学生部に事務官として就職していたわけです。どうしてかというところ、先ほどの石岡繁雄さんから私が大学卒業するに際して「ナイロン・ザイル事件はまだ終了していない。われわれはそれにむけて膨大な努力を必要とする。また私達の山岳会である岩稜会が『穂高の岩場』という初めての写真によるガイドブックを作成中で、これに手がいるから、名古屋大学に勤務しないか。」と言われました。その一言は私には絶対命令のようなものだったものですから私も「はい、わかりましたそのとおりにいたします。」ということで名古屋大学に勤めて居った次第です。

田村 井上靖は、日頃自分の作品について話すことはありましたか。また執筆中の作品のことや、構想中の作品について話をすることはありませんでしたか。それぞれ、もしあればどのように話していたか。教えてください。

石原 二次会三次会で酒が進みますと先生は非常に能弁になられます。普段はあまりお話にならないが、進んでいろいろなお話をしてくださいました。そのときにいろいろ、これから書こうという小説のこととお話になっていたわけですけど、これは、私どもの迂闊なことで、そのとき聞いた時は非常に感心して「あーなるほどなあ」というような聞きかたをしていた訳ですけど、感心したという思いだけが残って、その内容については具体的にいったいどうだったかということは今思い出すことはまったく出来ません。本当にメモしておけばよかったということを思っております。

ただ、孔子のことはよくおっしゃってました。孔子はこんなこと言っているよ、これは真実を突いているとか、言葉の中心を見通したようなお話をしている感じがしました。が私の受け手の方が幼稚で十分なお返しができていません。ほんと、申し訳ないと思います。

田村 孔子について井上靖は周到な準備をしましてね、私もずいぶんお話を伺うことはありましたけれど。
石原さんにとって「氷壁」とはどのような作品でしょうか。率直なご感想をお話してください。

石原 小説「氷壁」につきましては、私共の関心があったのは、登山行為のことだけ、ナイロンザイルが強いが弱いかもしれないという風を表現なさるかということだけ

たとは思えないし、そうするとなぜ切れたんだということになる。失礼、なぜ切れなかった。もし、操作をやつて仮に切った可能性があるかとわかったら、不思議でよくはないナイロンザイル事件のことがはつきりしないことがあります。

石原 公開実験が起きて非難が私たちに集中したんです。切れないという方、それから偽りの発表をしたんではないかということに尽きたのです。

早稲田大学の山岳部の監督で、関根さんという方が「化学」という機関誌に「切れた」ということをいっているけれどもほとんどないことだ。ナイロンザイルは切れるはずないんだ、自分たちがビバークしたときにアイゼンで踏んで傷をつけたのではないか。罪をナイロンに着せたい気持ちも分かるが……といったことをはつきり書かれています。で、まあそういうようなことで私たちのいうことが間違いだということ世間に広めるようになったわけです。

ところがですね。石岡さんのところに、手紙が来たりするわけです。それは、実験を公開した東京製綱の社員のかたからの「自分たちは良心の呵責に耐えられない」と。今でいえば内部告発です。それから繊維を提供した東洋レールの研究者も「実験室でヤスリで実験した場合、ナイロンはそういう剪断力に弱点がある」ということがわかった。公開実験で切れなかったことが不思議だ。」というようなことがあるわけです。

そのときに公開実験では登山者を大勢呼び集めて実験し

しか関心がありませんでした。

文学のことはまったく分からないので、判断できないわけですね。文学の善し悪しについては……そういう幼稚な人間なんですけど。

登山行為に間違いが無いナイロンザイルに対する判断に誤解がないかということだけが関心でございました。

登場する人物その他については、これはもう先生のお創りになった人物だというふうに割り切つて考えています。

田村 最後に人間・井上靖の魅力についてお話しください。

石原 たとえば最初に先生とおよびした時に感じているように、とにかく物事を正確に把握する。そしてその中からどういうことを引き出すかという作業をなさるのを間近に拝見して、感心することはかりでした。そういうことです。

質疑応答

井上修一氏 よくわからないことは、大阪大学の工学部の教授がナイロンザイルが切れるか切れないかを実験をやったんです。公開実験を行いました。そしてその結果切れなかった。しかし、石原さんたちが滑落したということを知った登山グループの人たちがやると切れる。そうすると客観的に見て大阪大学の実験の時は切れないという。公開実験のとき大阪大学の先生が何か切れないような操作をし

ましたから、三重県の山岳連盟も役員の方は見学に行つていたわけですが、「どうもあの岩角、丸めてあったような気がする」というようなことをおっしゃるわけです。であとでだんだん調べてみると、実際に丸めてあったのです。90度の岩角に対しては1ミリ、45度、まあ45度なんて普通、引っかけないですけれどね、そういう刃物のような45度の岩角については2ミリの丸みがついてありました。

90度の岩角に対しては1ミリ、45度の岩角については2ミリの丸みがついてあったことがはつきりしたわけです。実験すればその通りになるわけですね。丸くしてないと切れるんです。高さ10メートル位の槽の上で実験した訳ですが、それが、岩角がまさか丸めてあるなんて誰も思いません。

岩角に弱いんだということで、岩角で実験するんです。だから丸めてあるなどと誰も思わない。そのときは思っていなかった。だんだん調べてみると、丸くしていなければ公開実験通りの結果が出ない。ということが非常にはつきりしたわけです。だから私はこれは科学的に根拠を承知した上、切れない結果になるように作られて発表されていると……。

その後、だんだん積み重なってナイロンザイルは岩角に弱いと、穂高で使った8ミリの直径のザイルは、ザイルとして使つてはいけないということまで非常ににはつきりとしたわけです。

これがその新聞記事に出ています、(資料提示)。登山用ロープの安全基準の制定です。これに採用されてナイロンザイルとしての公の規格が作られました。これは石岡繁雄さんの大功績です。それ以来、岩角のことがっている事故はなくなりました。それまで、二十人近く亡くなりました。岩角で…。

井上 僕が一番疑問に思っているのは。公開試験で切れなように、意識的に、意図的に角を丸めてたんですか。

石原 そうとしか考えられません。メーカーとの打ち合わせでそういう実験装置を作ったのですね、

井上 そのようにして切れない実験をしてそれは、誰のために、何の目的でしたのでしょうか。

石原 東京製綱としても当時日本最大、今は世界一のロープメーカーなんです。それにしても登山で使うザイルなんて本当にサビで作っているようなもので、売り上げからすれば、本当に微々たる商品なんです。

ところがザイルのために自分たちの会社の新製品として売り出し中のナイロン・ロープが非難を受けるということは、耐え難かったんでしょうね。

ひっくり返してという気持ちがあつたんでしょうね。当時の社長は「どんなことでもするから押し通せ」というこ

したので。そういう使い方をしています。

浦城 父が亡くなりましたから「かえる会」の方達が母を「徳沢園にお連れする」といって下さり、みんなで徳沢園にまいりました。奥又白の若山さんのお墓には、そのとき初めてお参りをさせていただきました。あれからあのお墓はどうなっていますか。そのままですか。毎年石原さんや兄の石岡さん、山の仲間たちがあのお墓まで登ってお参りをしていると同時間聞いて感激したのですが。

石原 あれからどうなったということですね。あの場所はあるところにある木を切って、そこに槽に組んで、その上に遺体を乗せて焼いた場所なんです。そこにケルンを作りました。ただ、あそこは国立公園なんです。国立公園の中にお墓を作ってはいけません。だから、お墓でなくてケルンという呼び名で呼んでいます。

司会 黒田さん一九七一年と一緒にネパール・アフガニスタンに行ったことがありますね。その時の様子を話してください。

黒田佳子氏 石原さんがモデルの「氷壁」が掲載されたのは、私が小学生の頃。小説「星と祭」に書かれたアフガニスタン旅行に石原さんたちと一緒に行ったのは、もう大学を卒業して数年も経った頃でした。父が突然「山の連中が

とおっしゃったそうなんですけど。

その当時ナイロンは世界的に注目されていて、漁網に良いとされて麻のロープからナイロンに移っていったわけですね。漁網に使うロープの量は膨大で、東京製綱の利益の大半を占めていたらしいです。「底曳き網」で魚を捕る人たちがナイロン製の網は水底で使うと網がよく切れるという声が上がっていたそうなんです。だから、「漁網まで被害が及ぶと大変だ」ということからナイロンは岩角に弱いという印象を消してしまえというようなことだったんじゃないかと。

これは、私共の推測なんですけど、そういう社会の状況でございました。

浦城幾世氏 直接的なことをお伺いさせていただきます。石原さんは若山五朗さんとザイルがつながっていました。そのナイロンザイルが切れて落ちた、その後、その切れ落ちた場所の山には登られたんですか。登ることはしなかったのですか。

石原 山登りは続けております。山登りをするとき、事件後もナイロンザイルを使用しましたけれど、岩角には弱いということを承知した上で、鋭い岩角にかかるような使い方を一切いたしませんでした。

岩角にかかったらパサッと切れるんだと。

まっすぐ引つ張るのには強い。ということを知っていま

ヒマラヤの上で月見しないかと言ってきた。」と話してくれて、その数日後「佳子、一緒に行かないか」と誘ってくれました。特別に惹かれたわけでもないのですが、そのまま参加になりました。

カトマンズからプロペラ機で出発し、いよいよ霧のかかったヒマラヤの麓に着いた時、私当時日本で流行のミニスカートとハイヒールの格好でした。すると、直ぐに石原さんややって来て怖い顔で「すぐにその靴を脱ぎなさい」とおっしゃったのですよね。理由はなにもおっしゃらない。とにかく「そのヒールは脱ぎなさい」と。私のほうは「えっ、何で」という感じでした。

父は石原さんのことを、「あれほど冷静な人を知らない。」とよく言っておりました。「もともと、冷静でなければ、命がけの登山ができるはずがないよ」とも。立派なリョクやアノラック姿で山に立っている父の写真は幾つも残っていますが、それは前後左右を親しい登山家に囲まれて案内されたからで、父は一人ではどんな山も登りませんでした。「素人は登山に安易に手をだすべきではない」これが父の信念でした。

ヒマラヤ登山旅行は私にとって貴重な体験になったのですが、それでも日本が舞台のはずの連載小説「星と祭」に、自分たちの旅行が挟まって書かれている唐突さにとまどった記憶がありました。

「星と祭」の題から推察すると、父の構想には初めからどこかの登山が設定されていて、どこかに行けたらよいか

と望んでいた状態だったのでしょね。それが山の仲間の協力で実現できたといった事情だったのでしょう。

ヒマラヤ旅行の前半はアフガニスタンを廻つての旅でした。なんだか魅力的な青年がいるからと、石原さん紹介されたアフガニスタンの青年に父も好感を持って、結局、案内人として一緒にアフガニスタンを回っています。

東京オリンピックに彼が国旗の旗持ちで入場と聞いたのですが、本当ですか。

石原 それは初耳です。

黒田 私はそう思っていました。

石原 アフガニスタンでホッケーをしていたという話は聞きましたけれど。

入場式で旗を持って歩いたという話は私は聞いておりません。がそれはあつたかも知れません。ナジブ君というのは、お父さんが初代の日本代理大使です。その人の長男で名古屋大学に留学しています。そのときの身の世話を私が学生部の職員でしたからしました。

食べ物などをすべて調べて、それで親しくなつた。

それでアフガニスタン行つたとき、私が引つ張り出したんです。

是非ついて来てくれ、現地の交渉もお願いしたいと。そういうことで、彼は進んで参加してくれました。という関

景も、その土地、その土地の人々には特別な思いが籠もる。そんな当然の事実、改めて気づかされました。

司会 どうですか石原さん。注意されたということはあります。

石原 ヒマラヤ旅行から帰って、まもなくして黒田さんと結婚されましたね。あの旅は井上先生からの送別旅行だったんだなあというふうに、後になって私は思いました。かわいくてしかたがないという気持ちが出ていました。

井上 「氷壁」を書いているときは中学生から高校のとき。昭和三十一年の四月から高校に行きました。父親はよくいつてましたけど、「登山家の人たちにとってはたぶん石原さんや他の人もそうなんですけど、ナイロンザイル事件。それが、大きなショッキングな事件で、ナイロンザイルに対するものの考え方と登山家の対応の仕方とかそこらとてみたら、亡くなった弟の死を無駄にしない。いろんな思いがある。だから石岡さんの思いと、石原さんの思いと、私が調べる思いもある」だから父親は当初から「ナイロンザイル事件」そのものよりもナイロンザイルの切断を巡って小説を書きたかった。父親にとってはそこで滑落して死んだ若山五朗の死と、若山君を支えきれなくて、ナイロンザイルを意図的にナイフで切つたのではないか、とい

係です。

黒田 ヒマラヤ旅行が書かれている「星と祭」。毎日新聞に掲載されたこの小説は、子供を失った親の苦しみが延々と書かれているストーリーで、初めの数ヶ月は読者の反響一つ無く、新聞社が困つていたので話を聞いています。

もっとも、琵琶湖の十一面観音信仰に触れる頃からは、多くの反響があり、琵琶湖の近辺にも訪れる人が増えたとも聞いています。

娘の死に罪の意識を持ち苦しむ主人公も、日本から遠いヒマラヤで星や月を見つめるうちに、子の死も結局は運命だったのかと納得して、話は終わっている。特殊な内容のせいもあるか、この作品を読みながら、感想も言わず大切にこの本を持ち続けてくださるような読者が、思いがけなく多くいるのではと、気づいたのは父が亡くなった後のことです。

どの旅行でもいつも川に興味をもつ人でした。ヒマラヤにはドート・コシ、ボーテ・コシとかいう溪流が合流した地点があります。その時も、その傍らに立つてじつと見つめて、動こうとしなかった父の思い出があります。何にそんなに惹かれるのか不思議にも思いました。

あるとき、故郷天城の村に生活していて、川の合流地点にある自分の村は、他の村々とは違う特別な村なんだと思つて育つてきた、との父のエッセイを読み、ああと思つたのです。他所のものにとっては何気ない地形や美しい風

う石原さんが受けた誤解とか立場を使つて中心にして小説を作つたかつたんじゃないかと、私は思っている。

石原さんが受けた誤解とか、価値とかそういうものを使つて「ナイロンザイル事件」を材料にしたんですね。小説家として、ただあのいろんな事があつて、父は「俺は小説家で、氷壁」という材料を使つて書いたのが、本当に自分はこれでいいんだらうか」という気持ちがいづつもあつたのではなかったのか。本当の登山家とは思ひが違ふ、紹介があつて書いているのですが父親は「でもそれでもいいのだから」としての迷いがあつた。それが、一番売れた作品。売れ口のある作品の一つで、作品としては成功作だと思います。

石原 まだ、「氷壁」が小説になつたところにはナイロンザイル事件は終了していい、結論は出ていない。特に私達は訴訟を起こしたりした相手の所行を告訴したりしてましたから。取り上げにくい材料ではなかったのか、それを材料に使つていただけた。小説の材料に使つていただいたことは、世間にはそれが知れ渡つたわけですから私たちには援軍になりました。

世論はまったく切れないじゃないかという声が強かつたわけで、「ナイロンザイル事件」があるということ世間に知らしめた。ということは非常にわたしたちにとって援軍になっていました。石岡繁雄さんも「是非ともこれをきちつと結論を出さなければいけない」という、まあ支えに

なつたのではないかと思えますね。

井上先生はどつちがいいとか悪いとか、そういうことは
いっさいおっしゃいませんでした。ただ「氷壁」に出てく
るザイルメーカーの名前がですね。佐倉製綱というんです
よね、「さくら」といったら欺して売るときに「サクラ」
のお客が買うというのではないのか、先生はなにもおっしゃ
いせんでしたけれどね。

我々に好意をもつていらつしゃったんだなあとということ
を非常に感じました。

田村 二十年くらい立った「過ぎ去りし日々」に「私は氷
壁という小説の主人公を石原氏の立場においた。もちろん
小説では事件と無関係な物語が展開していく。がその中で
ナイロンザイル事件を正面に据えて石原氏の立場で書い
た」こういう風に振り返っているんですね、でいま井上修
一さんのお話なさったことと絡めてどうでしょう。

石原 取材の過程でも私たちに對して好意的でしたね。あ
あそうですか、そうですね、自分のご意見はおっしゃらな
いんです。私どもの言うことを納得していただいたというこ
とです。そうしたことを非常に感じておりました。

瀬戸口宣司氏 井上先生の小説は、事件を面と向かって扱
わずに裏の方に流しながら使っている。「氷壁」もそうで
すし「下山事件」もそうです。「長崎の原爆」もそうです

そして「山のことはまったく知りませんので、すべて教
えて下さい、ただ、ここにはロマンがないのでロマンを一
つ加えてもよろしいか」と言われたと、石原さんが何かに
書いておられた。

とにかく、考えるひまも時間も何もなくなつて、材料が来
たから飛びついた新聞小説でした。

それからもう一つ、「氷壁」を書いている時に、私は、
父と何回か一緒に穂高へ登りました。当時の父は、ものす
ごく忙しく日常あまり歩くこともなく、自動車ばかりの生
活でした。長越さんや山の方々が、つれて行って下さった
から登れたのです。父はゆっくりゆっくり登りました。歩
くのが精一杯な人が穂高へ登るのでからこれは大変なこ
とでした。そして、ひと休みしては、「ああ、山がきれい
だねー、見てごらんよ」とか言いながらちつと岩に腰掛け
て、ひと休みしてまた登りました。

父にしてみたら本当に忙しく大変なときの取材登山でし
た。この頃はまだ「かえる会」が出来る前のことです。

田村 それではこれで終わりにしたいと思います。石原さ
ん、長い時間、貴重なお話をありがとうございました。

し他にもありますが、ちょっとした誤解を受けて、ストー
リーテラーだとか大衆小説というようなことが一部で言わ
れている。ですから「氷壁」についても石原さんのおつ
しやる、事件がまだ続いている中で、書かれている立場と
してはやはりつらかったのではないかと思います。
ひとつ伺いたいのですが、涸沢から徳沢小屋まで、何時
間くらいかかりますか。

石原 徳沢からは登りになります。涸沢までは半日かかり
ます。涸沢から徳沢へ降りるときは下りですから、足の速
い人で3時間ほどでくだります。

浦城 「氷壁」は、父の作家生活の中で、一番忙しい時期
に書いた小説だと思います。

たまたま、「ナイロン・ザイル事件報告書」(ガリ版ズリ)
が三笠書房の長越茂雄さんの手に渡りました。長越さん自
身、小説を書くこうとされていた方なので、「これは小説に
なる」と思われて、父の所に早速届けて下さった。父はと
にかく、忙しい時期だったので、次の小説を考える暇も時
間も何にもない状況。そこへ、小説になりそうな材料が来
たので飛びついたのだと思います。

そこで、「これはおもしろい」、書くということで長越さ
んにお返事をしました。それで長越さん、石原さん、石岡
さんの三人に井上家に来ていただき初めて石原さん石岡さ
んにお会いしたと聞いています。